

THE ROTARY CLUB OF TSURUOKA



第 102 回 例会

1961年6月20日(火) 晴

次 回 例 会

— 6月27日 —

卓話予定 「鶴岡ロータリークラブ創立より
27年を顧みて」

小花盛雄君 (27年間会長を勤められた)

出席報告 田中君

本日の出席	会員数	41名	欠席者	板垣君、五十嵐君、今間君、大竹君
	出席数	35名		佐藤(貞)君、長谷川君
	出席率	85.37%		
前回の修正	前回出席率	82.93%	メモアップ	6月16日 谷口君 塩釜RC
	修正出席数	1名		
	確定出席率	85.37%		

司 会 小花会長
 ゲ ス ト 和田光利氏 (本日のスピーカー)
 報告及び連絡 小花会長

- 谷口君に1年間出席率100%の記念バッチを贈呈
- 佐々木ガバナーからお手紙を頂いた。

小花盛雄様

佐々木孝三郎

拝啓 会報なかなか面白く読みました。大した御努力ですネ。「New Brunswick市の歴史物語」は面白い。「本日の献立」は更によい企画だと存じます。たゞし卓話はSpeech(Speakではない) Smile BoxはSmiling BOX にすべきです。担当の方へお伝え下さい。

Mr pattersonが来てにぎやかでした。皆さんによろしく。

敬 具

鶴岡ロータリー・クラブ

事務所	{ 山形県鶴岡市馬場町 鶴岡商工会議所内 (TEL 123・1563)	例会日	火曜日
		例会場	ひさごや (TEL 707)

我RCの会報がガバナーを動かした、ということで大変結構である。次期担当の方にもよろしくお願ひする。

- 会計担当の方は御苦勞様であるが、年度末決算をやつて頂き度い。7月の第2例会並びに報告を行い、その時に新旧役員の見継ぎを行ひ度い。
- 東京大会で海外のクラブとバナーの交換を行つたが、後送を約束したものの中の第1便として、次の便が到着した。

Rotary Club

"Mortager et perche"

Mortager. 9th June 1961

(Orne)

France

Dear Friends

日本から帰着すると直ちに私は今日、貴方にお約束したように、私のクラブのバナーを送つた。あなたがそれを、成る可く早く受け取られることを望んでいる。

バナーに描いてある馬の頭は "peacherons" と呼ばれる偉大な耕作馬は、我々の地域から育生されるし、又多くの有名な競走馬も Mortager 全周辺の牧場で育生される、ということの意味している。

東京大会中に貴方が貴クラブのバナーを下さつたことに対して、私は喜んで繰返して厚くお礼申上げる。

我クラブの全員と私自身から、我々の心からのロータリアンの御挨拶を贈る。

Doctear J.R pillot

幹事報告 小池副幹事

◎ 新クラブ誕生

東京王子RC

例会日 水曜 12時30分~13時30分

例会場 上野 精養軒

◎ 会報

花巻RC

八戸東RC

塩釜RC

延岡RC

それぞれ会報が到着しております。

◎ 入会希望者通知

芦屋RC

酒田RC

私達にもつとも近いクラブの役員諸兄を列記します。

会長(理事)

中島 定之助

理事(職業奉仕)

中村 太助

副会長(理事)

村田 与治兵衛

理事

中沢 浦理

幹事

佐藤 勤

副幹事

渡辺 竜郎

会計

菅原 権吉

SAA

相馬 治一郎

SAA(副)

滝沢 幸一郎

理事(社会奉仕)

本間 久治

理事(国際奉仕)

前田 良太

理事

村上 徹

佐藤寅之助君より (ボーイスカウト庄内地区委員長)

ボーイスカウトに就いて申上げる。

先般は皆様に賛助会員になって頂いて有難う。

ボーイスカウトは青少年補導の大切な機関であるが、その運営は公的機関に頼ることは出来ない事になつている。

運営資金としては「とうろう流し」などで得る僅かのものしか得られなかつた。今回御援助を頂いて誠に有難い。

来る可き羽黒大会には、現在700名位の参加申込みがあり、1000~1500名の参加人員を予定している。之に対しても御援助を決定して頂いて有難い。厚くお礼申上げる。

卓 話

Speech

「郷土の民話」 鬼 婆 和田光利氏

昔々ある山寺に和尚様とノ人の難僧が仲睦しく暮らしておりました。外に生物と云つてはノ匹の黒猫位のもの。いや、まだいるまだいる。台所を荒し廻る風達。軒場に巢を作つている雀たち。ところで長い長い冬が過ぎて春が来ました。野も山も花ざかり、それで難僧は山に行つて花を採つて来たくてしようがない。御本尊様に差上げる花、方丈を飾る花。

和尚様、和尚様、山にやつて下さいまし、花を採つて来たいのですから-----これこれ安念や、近頃山中には恐ろしい鬼婆が棲んでいて、人間の子を見ると食べてしまうから山にだけは行つてくれるな。平常はいたつてすなおな難僧だが、どうしても和尚様の云う事を聞きません。よんどころなく経文を記したありがたい御札を3枚持たせて山へやりました。お小僧、山に入つてみますと、どちらを見ても花ざかり、うかうかとして花の中を歩いている内に、水い水い春の日も暮れかかつて参りました。と、向うの方から白髪の品のよいお婆さんがやつて来ました。

安念と申すか。—— わしが花を折つてやる。成程安念は子供だから背が低くて高い枝に手が届かない。それで云われるままに花を折つて貰つた。これこれ安念坊や——今日は遅くなつたから、わしのうちで泊つて明日の朝早く戻つたらどうじやの-----お婆さんの後から谷川添いに段々、道を急いでいると、それこそ突然大猿が難僧に飛びついて来た。—— あつ、こわい——何もこわい事はない。永年わしの飼つている猿だが、久し振りに人間を見て歓迎したのだ。安念はゆつくりしました。やがて婆さんの家に着き、掃火にあてて貰つたり、栗がゆなどを御馳走になつている内に睡眠が襲つて来たので、別室に床をとつて寝かせて貰つた。

それからノ時間、2時間、それとも3時間——ふとした弾みで安念は目をさました。あんな好天がいつのまにか変つたものやら、軒からは雨垂れがポトンポトンと落ちております。よくよく耳を立てると雨垂れはこんな事を云つて落ちている。——タンタン垂木の水弾み、起きてバンバの顔を見る難僧こわくつてガタガタふるえ乍ら障子の穴から覗いて見ると、昼間のやさしいお婆さんは今は見るからに恐ろしい鬼婆になり、満面朱をそそぎ口は耳迄も裂け庖丁をデガラデガラと磨き澄ましている。安念一計を案じて、婆さん婆さん厠に行きたいから、どうぞ一寸脱糞にやつてくれ。——そこで垂れてよろしい。——でも私は小さい時から厠でしかやつた事がないから——3拝9拝のあげく腰に縄を付けられて、厠にかがむ事になりました。もうええか——まあだ—まだ——もうええか——まあだ—まだ——難僧はどうしても逃げ出さなければならぬので、腰の縄を解いて厠の柱に結び付け、ありがたい御札を縄に挟んで、御願した。御札様——御札様、今度鬼婆が呼んだら断わつて下さいと、厠の窓から逃げ出してしまつた。夢にも知らない鬼婆—大声を張り上げてもうええか——まあだ—まだと御札が答えてくれる。もうええか——あんまり時間がかかるので、鬼婆来てみると厠はもぬけのから、激怒した鬼婆はどンドン追い掛けて来て、安念はえりがみをつかまれようとした——さつとノ枚の御札を振り撒いて安念は吠える様に叫んだ——山できれ山できれ——突如大きな、天に届く様

